滋賀 近江八幡（おうみはちまん） 水都八都（すいーと はーと）

近江八幡観光物産協会
OMIHACHIMAN TOURISM ASSOCIATION

「水都」は水郷のまち、「八都」は近江八幡を指しており、これをスイートハート（恋人）とかけて“近江八幡は郷土の人にとっても観光客にとっても「恋人」のような素晴しい街である”ということを表したものです

発行責任者:近江八幡観光物産協会　3000部発行／定価50円
滋賀県近江八幡市為心町元9番地1（白雲館内）TEL:0748-32-7003
2002年6月7日 初版　2004年7月1日 二版　2007年3月1日 三版
2011年3月1日 四版　2019年3月1日 五版
No.18

OKI SIMA 沖島

世界でも数少ない、ひとの住む湖沼の島
琵琶湖最大の島

歴史

万葉集などにも沖島に関する詩が見受けられる事や大正期に赤碕沖付近で漁を行っていた船からシジミに混ざって縄文土器や和同開珎が発見された事があるなど、かなり以前から沖島付近に人々の往来はあったと思われます。

和銅年間に近江の国守であった「藤原不比等」（藤原鎌足の子）が奥津島神社を建立し、奈良時代には、称徳天皇への反逆の罪で追われた恵美押勝（藤原仲麻呂）が一族らと共に沖島に一時期住んだと伝えられています。しかし、本格的に人が住むようになったのは、保元・平治の乱（一一五六～一一五九）による源氏の落武者七人が山裾を切り開き漁業を生業とし居住したことに始まると言われ、彼ら（南源吾秀元、小川光成、西居清観入道、北兵部、久田源之丞、中村磐徳、茶谷重右衛門）が現在の島民の祖先とされています。

琵琶湖に浮かぶ沖島は戦略的にも重要な位置にあり、この事は数々の歴史書に見受けられます。南北朝時代には戦いに敗れた南朝軍の一部が越前・新田義貞との連絡網を確保し食料と軍備を建て直すために頭山一帯に城を構えたとされ（蒲生郡史）、室町時代には、当時勢力を伸ばしつつあった堅田（大津市）の湖賊が比叡山延暦寺の攻撃によって町が焼き払われたため、約二年間に沖島に避難生活をしたとの記録があります（堅田本福寺文書）。

また、八代将軍足利義政は湯谷ヶ谷（番所山）に島民に湖上を行き交う船の監視と取締りを命じた湖の関所がありました。戦国時代には、織田信長が浅井長政に対して行った「手筒山の戦い」や「小谷城攻め」の際に、島民に船を差し出すよう命を出し、これらの一戦で活躍したことにより、信長から感謝状と琵琶湖一里四方を禁漁区とする特権を付与されています。文禄の役（一五九二）でも朝鮮出兵に従軍し、（管浦観音寺文書）、関ヶ原合戦後の徳川家康による石田三成への「佐和山城責め」においても水軍として活躍しました（沖島共有文書）。以後も、時の権力者から、航路の警備、輸送等の重要な任務を務める見返りとして、漁業権の特権は認められ続けました。

徳川時代にも慣用専用漁場として認められ、堅田の漁師との八年にも及ぶ論争においても京都町奉行で沖島側主張が受け入れられ、明治八年には滋賀県知事より永代借用権として認められましたが、最終的には戦後の漁業法改正により消滅しました。

沖島全景（涅槃仏の様にも見える）

生活

沖島は淡水湖の中に人が住む島としては国内唯一で世界的にも非常に珍しいとされています。昭和三年に沖島にランプが灯り、昭和二十三年に湖底ケーブルによる送電が始まりました。水道は昭和三十五年に上水道敷設が行われ、昭和五十五年に簡易水道が設備され、昭和五十七年には下水道が完備されました。以前は、島には井戸が無く、早朝に琵琶湖から水がめに水を汲んでおき、それを生活用水として活用していました。情報技術面でも平成十四年度に光ファイバーの架設工事が始まり、島の生活も利便性が増しました。

また、島内には元気なお年寄りが多くおられることも特徴で（市全体の高齢化率に比べると高い一方で要支援・介護を必要とする率は低くなっています）これは、「支えあい・ふれあい」というかつてなら何処にでも存在したコミュニティーが残されていることの証明ではないかと思います。また、男子が生まれると玄関前にお地蔵さんを安置する習慣があり至る所で見かけられます。

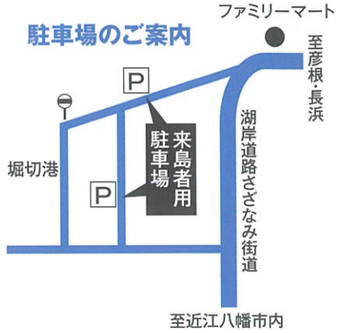
島内は細い道で結ばれています。

堀切港に接岸する通船

交通

沖島へは一日十二本（日曜は十本）の通船を利用。乗り場である堀切港までは、近江八幡駅北口より近江鉄道バス休暇村行き（乗車時間約35分）堀切下車すぐ

※堀切港には一般の方用の駐車場はありません。※近江鉄道バス（℡0777-589-2000）

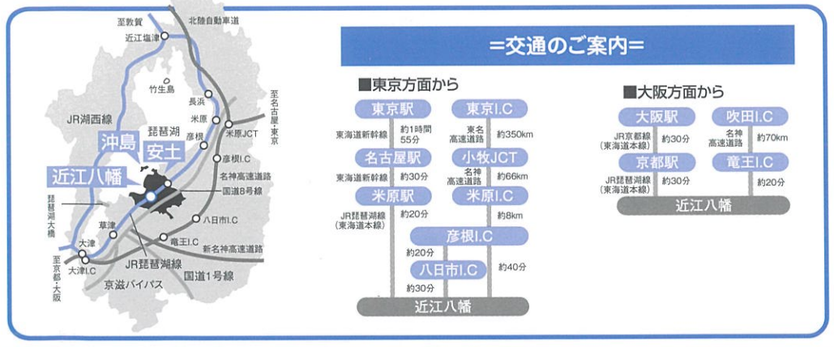


堀切港⟷沖島漁港

（約10分）料金500円（定員50名）

定期便　時刻表（★日曜運休）

堀切発	沖島発
7：15 ★	7：05 ★
7：45 ★	7：30 ★
8：15	8：00
9：15	9：00
10：15	10：00
12：15	12：00
14：15	14：00
16：15	16：00
17：15	17：00
18：30	18：10
19：45	19：30
21：00	20：45



団体でのご利用なら

おきしま通船 TEL.090-3842-6571
善通丸 TEL.090-3859-8720

沖島遊覧船 もんてクルーズ

※問合せ TEL.0748-32-5589

沖島で暮す島民の案内による40分の船旅。

運行期間 4/1～10/31

7名様以上よりご予約頂けます（定員25名）

発着は沖島漁港

近江八幡観光物産協会ホームページ
http://www.omi8.com

近江八幡市ホームページ　http://www.city.omihachiman.shiga.jp/

沖島ガイドマップ

*沖ノ島、沖之島、沖の島、等々書かれているものもありますが、行政では表記方法は「沖島」、読み方は「おきしま」に統一しており、対岸の一部を含めて近江八幡市沖島町に属しています。

*島の面積は1.53km　周囲6.8km、東西約2.5km、対岸からの距離は約1.5km。

西福寺（浄土真宗本願寺派）

七人の落武者の一人、茶谷重右衛門の末裔が蓮如（本願寺第八代上人）に帰依し庵を建てたことに始まります。寺宝には蓮如上人直筆の虎斑の名号と正信偈が残されています。

虎斑の名号／正信偈

茶谷重右衛門の妻が産後間もなく死亡したことで、子供いとおしさに幽霊となって現れるようになった。茶谷重右衛門（法名：釈西了）がこのことを不憫に思い、氏神に祈ったところ、夢の中で、「明日蓮如上人が来られるので、お願いするように」とのお告げがあり、偶然にも翌日、越前吉崎御坊から堅田本福寺に向かう途中に遭難し、沖島に立ち寄った蓮如上人にお告げのことを話したところ、上人は幽霊を教化するため六字の名号（南無阿弥陀仏）を与えられた。これらはムシロの上で書かれたため、南無阿弥陀仏の字が虎斑のような濃淡が出ているので、俗に「虎斑の名号」と呼ばれています。正信偈（四句の御文）は蓮如上人が島を去る際にお別れの形見として残されたものです。

蓮如上人の像（西福寺）

願證寺（浄土真宗本願寺派）

沖島の住人が蓮如上人に帰依し、法名を釈願證と授けられたことに始まります。

弁財天（厳島神社派）

長松寺（彦根市）の僧が記した沖島弁天記に弁天を祀ったとの記録が残されています。雨乞い弁天として信仰されており、明治九年にはこの地で雨乞いを行った記録も残されています。

瀛津島神社（祭神は奥津島比売命）

藤原不比等の建立に始まります。鳥居の社標は憲政の神様と呼ばれる尾崎行雄（愕堂）。宮世話は島で四十二歳になったものが一年間行い、その交代式は大晦日の深夜に行われます。

奥津島神社鳥居

沖島小学校 HP

明治の学制発布により西福寺内に開設されたのが始まりで、明治四十二年に旧校舎地に移転、平成七年には現在の地に新築移転しました。中学校（分校）は、昭和三十九年に市内の本校に統合されました。

沖島小学校校舎

沖島歌集

風渡るにおの湖　空晴れて　月影清し　沖の島山
（続千載和歌集）

風わたる　のみずうみ　空晴れて
波もさわがぬ　わらわえの浦
（千載和歌集）

降る雪は　それともみへず　ささ波や
寄せて　帰らぬ　奥津島山
（新拾遺集）

櫻咲く　奥津島山
見渡せば　波に掛れる　花の白雲
（新六歌仙集）

●湖上荘 HP　☎0748-33-9639
宿泊（食事のみも可）。要予約

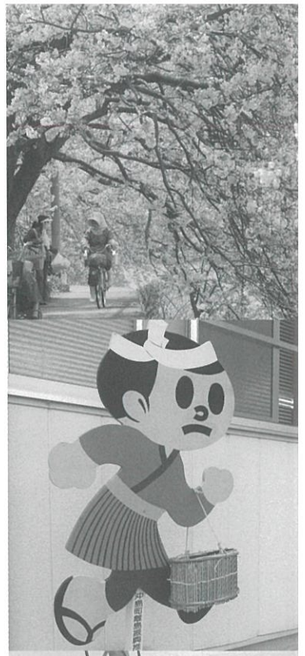
●沖島郵便局
昭和13年沖島郵便取扱所開設され現在に至ります。

●沖島漁業協同組合 HP　☎0748-33-9511

おきしま資料館
築100年以上の民家を改築し琵琶湖の生活を後世に伝えようと島民の手で整備され平成17年4月に開館しました。

湖島婦貴（ことぶき）の会　☎0748-47-8787
沖島漁業協同組合の婦人部により運営されています。当初は6名ほどの有志で"湖魚の若煮"を炊いて、島を訪れるお客様に販売していたのが始まりで、今日では約30名が活動しています。
漁協会館内で佃煮やお弁当の販売をしています。

HP はホームページがあります



人口・町村制

文化二年（一八〇五）の資料によると、戸数は四十三戸・一九四人と記されています。一時期は戸数が一〇〇戸余りに及んだとされていますが、安政年間の火災で一部住民が対岸の町（近江八幡市船木町）に移住しました。かつての沖島は、彦根藩と対岸の伊崎寺の半分ずつの領地とされましたが、明治二十二年の市町村制施行後は、蒲生郡島村（大字沖島）となり、昭和二十六年に蒲生郡八幡町に編入された後、昭和二十九年に近江八幡市となりました（平成二十九年十月現在の人口は一三八世帯　二七八人です）。

漁港周辺風景

漁業

二七五億トンの水量を誇る琵琶湖は近畿一四〇〇万人の水ガメと称され、五十種類を越す固有種が存在するまさに宝の湖です。沖島の住民もその殆どが漁業関連の仕事に関わりを持ち、その操業範囲は琵琶湖一円に渡り、底引き、刺網、定置網、沖引網、貝引網、などの漁法により、エビ、鮒、鮎、ゴリ、イサザ、ワカサギ、ハス、シジミ、などが水揚げされています。港湾の本格的な整備は、「豊臣秀次」（豊臣秀吉の甥・近江八幡町開町の祖）が本格的に取り組んだとされます。又、大正・昭和の二度の御大典大嘗祭に鯉の蒸焼きが供物として献上されたことにより市場で有名になり需要が増した事などもありました。昭和五十六年には現在の秋篠宮様が皇族として始めて島内を視察されています。

以後、高度成長期の流れを受けて、昭和四十八年に琵琶湖総合開発が着工される頃になると、昭和五十二年に赤潮発生、昭和五十四年のブラックバス確認、等の水質汚染や生態系の変化により、漁業を取り巻く状況も厳しさを増し、近年は後継者不足などの問題も抱えています。

消防艇庫周辺風景

石材業

島を形成しているのは石英斑岩と呼ばれる良質の石材で、享保十九年（一七三四）の「近江與地誌略」（寒川辰清）には沖島について「湖中の一島なり。漁人多く此処に住み、其の島の石を取って之を売る」と記されてあります。この事からも、古くから石材の切り出しは行われていたようで、明治期には琵琶湖疎水、南郷洗堰、東海道線の鉄道工事、等々で活気に溢れました。当初は島外から石工が来ていたようですが、後に島の中から技術を習得し石工になる者が現れ、大正四年には沖島石材販売組合が組織されるまでに至りました。収益は自治会経費を補う事に加えて、対岸の土地を購入し米作農業を始めるなど島の食糧確保や経済効果にも大きく貢献しました。しかしながら、時代の流れで、コンクリートブロック時代に入り、湖上交通から陸上輸送にシフトする中で、次第に競争力を失い、採掘場の老朽化が進むなどしたことにより、島の地形が変わるほど切り出されたという沖島の石材産業は昭和四十五年の組合解散に伴い、その歴史に幕を下ろしました。

沖島左義長

今参局

「今参局」は室町幕府八代将軍「足利義政の側室でした。正室である日野富子は男児を出産しましたがわずか二十日足らずで死亡したため、今参局一族が祈り殺したとの罪で、沖島へ流罪とし、数日後に京からの使者により惨殺させました。その時に助けられたとされるのが彼女の子「櫻子」である。小説「櫻子」は昭和三十四年に大仏次郎によって執筆され新聞連載されました。